

ゲーテはすべてを言った

2024年に芥川賞を受賞したのは、修猷館から西南学院大学に行って、シェイクスピアを研究している弱冠24歳の鈴木結生（2001年生まれ）と言う若者である。

彼の受賞作「ゲーテはすべてを言った」と言う小説は、ゲーテ研究に一生を捧げるゲーテ研究の第一人者、博把統一（ひろばとういち）が、銀婚式にあたる12月に都内のイタリアレストランに妻義子（あきこ）、一人娘の徳歌（のりか）と食事に行った時に、食後に自分用にあてがわれた紅茶のティーバッグにタグづけされた文字に、「Love does not confuse everything ,but mixes.」（Goethe）と書いてあった。

ゲーテが作ったというこの箴言（しんげん・以下フレーズという）は一体どの出典か？ と言う謎解きの小説である。

この訳は、私が訳すと「愛は全てを混乱させるものではない、ただ、混ぜ合わせるだけだ。」と訳せる。

博把統一の訳によると、「愛は全てを混淆（こんこう）せず、渾然（こんぜん）となす。」となる。

統一は焦った。ドイツ文学、ゲーテ研究の第一人者である自分がこの出典私は知らないはずはない。でも知らない。どこに出典があるんだろう。

統一は結局この出典を探す事になるが、出典探しは、実は、自分の学者としての半生を振り返る旅であり、そこには、自分がゲーテに惹かれた理由やゲーテをこよなく愛するために 当時第一人者だった芸亭學（うんていまなぶ）のいる大学（東京大学と推察される）に一浪してまでも入学した事、そして芸亭學から後継者として承認され、彼の娘を妻にすると言う絵に描いたような日本的学者承継事実が述べられている。

妻は結婚後は、妻として家庭を守る傍ら、ドイツ人のガーデナーのYouTubeに私淑し、園芸愛好家として楽しんでいる。



娘の徳歌は小さい時から才気煥発、「読書感想文全国コンクール佳作」、
「中学生クイズ大会優勝」、「全国俳句選手権大会入選」などの賞状がある (94)。

娘は東大でない大学に入学しても祖父や父親の学問好きの道を受け継ぎ、
卒論のテーマは、「二つの書物、ヨーロッパ文化における聖書と百科全書」
という難解極まりないものである (36)。

そして、彼は、精進の末、ドイツ文学の後継者として着々と地場を固めて有名
になっていくプロセスが述べられている。

また、彼がドイツ留学中に、国内（東大）でメキメキと実力をつけてきている
3年後輩の然紀典（しかりのりふみ）の活躍と彼との交流、統一のドイツ文学
を受講する学生で、早くもゲーテに関する学識を深めている紙屋綴喜（かみやつづき）
が、食らいについて彼の薫陶を受ける事実が展開される。それこそサラダ式に登場する。
彼らは、一回の登場かと思いきや、最後まで、この物語を引っ張っていく。

この様に、出典探しの旅は、学問を志すものが求めてやまない、真理や普遍性を
どう見つけようとしているか、それを私生活や感性とどう調和させているかを描写
しているアカデミックエンターテイメントである。

学問や大学に一度は席を置いて研究生活をしたかったと（私の様に）望む人が
いれば、斯くありたいと望む様な研究者の人生、生活模様が描かれている。

そしてもう一つ、彼がこの出典にこだわる理由がある。彼の博士論文で、
彼を一躍有名にした処女論文「ゲーテの夢、ジャムかサラダか？」と言う論文に、
彼は、このフレーズと似ていることを意識したからだ。だから、矢張り、ゲーテの
言葉であると言う確信があった。

彼の「ゲーテの夢、ジャムかサラダか」の問題意識は、次のような内容である。

世界の多様性は、世界の複雑性に直結している。そして、この二つの価値観は抱き
合わせで西洋では議論された。そしてその二つを統合する統一性なるものはあるのか
について、ゲーテほど悩み抜き、書き残した人は他にいない。(30)

つまり、統一は、昔、自分が書いた論文の中に、すでに、混乱とミックスの概念
が生まれており、それ故に、ゲーテ研究の第一人者の彼がこのフレーズを知らない訳
にはいかなかったのである。



この小説は、これから以後、「多様性と複雑性」、「ジャムかサラダか」の議論と、このフレーズの出典探しを要素として進行していく。

もう少しこの小説の、いわば、調味料となっている「ジャムのかサラダのか」の解説をする。(30) 統一は世界観を「ジャム的とサラダ的」に分ける。

ジャム的世界とは、すべてが一緒くたに融け合った状態、サラダ的世界とは事物が個別の具象性を保ったまま一つの有機体をなしている状態を指す。

これが、アメリカ社会の垣塙とかサラダボウルとかのキーワードとして使用され、また、日本の和とか、統一と分離で混乱する英国のブレクジット問題や、昨今のウクライナ情勢でも紐解くキーワードとされだしている。

要するに多様性と統一性をどう棲み分けるかと言う重要課題としてこのジャムかサラダかと言う問題は、哲学的、社会的キーワードとして存在する。

このアイデアをゲーテはいつどこで見つけたと言うのか？

その出典探しの物語である。

まず、統一は、研究室に行って、ゲーテ辞典のサイトを調べた。しかし、愛とか、混乱とか、mix とか言うタームで検索するが出てこない。(38)

次に統一は、ゲーテ全集を2週間かけて読み直す。ゲーテの作品の中にある「パーリアの感謝」の中に、「万巻の書に現れた、いかなる心理や寓意も、愛が帯の役割を果たさなければ、所詮は全てバベルの塔に過ぎない。」と言う文章を見て、これで諦めればよかったけれども、イヤ違うと思って、再度次の方法を模索した。(43)

次に大学の受講生に聞いたが、誰も知らなかった。

ただ一人、ドイツ文学の同僚の然紀典が教えている学生の紙屋綴喜が、「先生は、元々、ゲーテは全てを言った。だからこのフレーズもゲーテが言った。とお考えになっているのかもしれませんが、一人の人間が全てを言うことなどあり得ない。でもゲーテは本当に全てを言おうとしたんです。それに、私は励まされます」と言った。

12月のある日、東大で日本宗教芸術学会主催のシンポジウムで然紀典教授の記念公演が開催された。パネラーは、然教授と、男性研究者Tと、娘の徳歌と、同い年の女性KMだった。

テーマは、ゲーテの著作「親和力」をもじった「神話力」の出版記念だった。神話力とは、人類の神話を生み出す力とその現代的意義が内容である。

彼の諧謔的、且つ中道的な発想は、新鮮味があり、会場を圧倒した。

学術書らしからぬ人間味があると同時に、【寛容はくつろげるか(寛容)】、

【やさしくはやさしいか】など、ことばのギャグに秘められた新鮮さに、皆圧倒された。



彼の自虐的と言うか、難解な格言が次々と披露される。

「不条理なるが故に我信ずる。」（テルトゥリアス）（56）

「愛の反対は無関心」（マザーテレサ）（58）などなど。

ついでに、統一は、紙屋との会話で次の言葉を引用する。

「ゲーテは個人の限界性をかなり意識していたね。芸術は限定において生ずる。多様さと複雑さに喜びを感じる人間は、いつも混乱の危険に晒される。」

話を元に戻して出典探しについてのべると統一は、思いつく限りの知人に、このフレーズの出典を知らないかとメールした。30名くらいからの返事は貰ったが、納得できる回答はなかった。然教授は、名言ではないのではないかと聞いた。

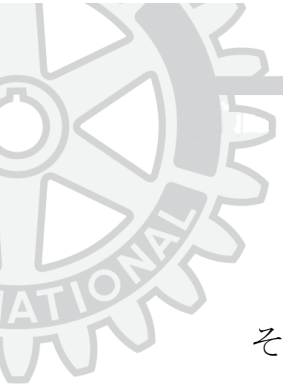
統一は、ビクトルユーゴーのセリフで、「詩は自然と同じように、その創造のうちに光と影とを崇高とグロテスクとを、言葉を変えて言えば、魂と肉体、精神と野獣とを混同することなく混合し始めるであろう。」これは要約すれば、詩は全てを混同することなく混合し始めると読めるが、矢張り、愛と詩では違う。統一はこの言葉とも違うと感じた。

大晦日、統一は、妻の父であり、恩師の芸亭學が住む仙台に行った。そこで統一は學と話をする。

學も敬虔なクリスチャンで、大学退官後は、東京から仙台に引っ越しそこでヘブライ語で聖書を写経するなどして相変わらず、学者然とした生活を維持してきた。写経は、すでに3度目らしい。書棚には彼の還暦記念として、ゲーテが死ぬ間際に発した「もっと光を」にちなんだタイトルの米寿記念論文集があった。

學との話は、ゲーテの色彩論及び、すべての色を混ぜ合わせると何色になるかなどの議論になった。虹の順番で色彩は増えて行ったとか、白黒だとか灰色だとか議論がなされた。この問題は、結局「見ないで信じるものは幸いである」という新約聖書（ヨハネによる福音書 20、29）という言葉を引用している。

そして、出典探しに苦悩している統一に対して、學は、こうアドバイスする。（117）
「統一君、言葉探しは、学者の本分、ミイラ取りがミイラになっても構わない。でもね、言葉はどこまで行っても不便な道具です。使い慣れると言うことがない…。それで、言葉では無いもの私は使ってみる。例えば「セックス」はどうだろう。確かにこれは、言葉より確かだ。近く感じる。何より温かい。でも続かない。やはり、僕は言葉の方が性に合う。何かと刹那的な感覚に辟易している世代だから、不変的なそれでいて普遍的なものが欲しいんだよ。そして、結局、僕には、祈りしかなかったんだよ。そしてまだ僕が君の先生のふりをするなら、



『お前の努力は愛の中にあれ、お前の生活は、行いであれ』、です。
それだけ忘れなければ、今のところ問題はない。」と言われた。
それを聞いて、統一はそれは、「マイスターの遍歴時代」の言葉ですねと答えた。

仙台から帰った後、東京では大変な問題が持ち上がった。

然教授の「神話力」が盗作であり、その他の彼の著作も、盗作であると言う
ニュースである。その盗作を暴いたのは、維神光（いしんひかる）と言う人物である。

彼は、「然教授の著作は、日常茶飯事で、第一作『やさしくはやさしくないか』、
第二作『寛容はくつろげるか』、など年を追うごとに悪化している。

最近も、他人の文章をまるで古紙を梱包機で圧縮し、パルプと共にドロドロに
溶かすように、自分の文章として用いる事に何の違和感も覚えない様になっていた。
然の虚言は、この頃から妄想症の領域に入って行ったとか思われる。

そして今回の神話力では、架空の人物の著作の盗用がその80%を占める。」
とこき下ろした。

一方で、然教授は、弁明もせず行方もくらましたままだった。

統一は、怒りと失望を感じたが、一方で、然をこれほど憎んでいる維神なる人物は、
統一以上に彼の論文を読み冷徹な分析ができたのだろうかと思問が拭えなかった。

結局、然教授は大学を退職した。

フレーズの出典探しはまだ続いた。

すると妻の義子（あきこ）が、そこまで気にするんだったら、会社に聞いて
みたらと言った。統一は、その意味がわからず何の会社かと尋ねたら、
ティーバッグを作っている会社よ。と言った。娘の徳歌が私が探してあげようと言った。
そしてスマホと格闘すること30分、その答えは名言サイトから取って
きたということだった。

そこで名言サイトで、ゲーテで検索すると何と300以上の名言があり、
本件フレーズは、出典調査中と言う表示が出てきた。これで、万事休す！

娘の格闘にも関わらず、答えは見つからなかった。統一は、
優れた芸術家は模倣し、偉大な芸術家は盗むと言うピカソやストラビンスキーに
言われた言葉や未熟な詩人は借用し、熟練した詩人は盗用するなど、
盗用と創造の境がわからなくなった。



話しはここから、急展開し、徳歌の恋人は、紙屋であることがわかる。

二人は、インカレの読書会で知り合い、お互い、今の若者の様にゲーテや西洋文学を遊び感覚で学んでいた。徳歌が読書会の発表の時に、発表すると、「そんなに引用ばかりしないで自分の言葉で言ったらどうか。」と紙屋が注意した。

すると、徳歌はその言葉にカチンときて、「言語システム自体が引用なんだ。ボルヘスだってそう言っている。」と言ったら、紙屋は、議論において、「権威を盾にする人は、知力ではなくて記憶力を用いているに過ぎない、ダビンチもそう言っている。」と言ったのよ。もうなったら、付き合うしかないでしょう！と言うわけ。

この物語もそろそろ終盤を迎える。

出典探しに懸命な統一は、定年も間近なところから、日本ドイツ文学界から、長年の功労を表して、ドイツへの2週間のご褒美取材旅行へ出かける。同行者は、妻義子、娘徳歌、そして徳歌のフィアンセであり、この物語の語り部の紙屋である。

統一は、年甲斐も無く YouTube に興味を示している妻義子が知り合ったウエーバーと言うドイツ人が、ゲーテの手紙を持っていると言う事、そして、統一のドイツ留学時代の友人ヨハンに会う事だった。

ウエーバーは、もう少しすぐ80歳になるとは思えない少女の様な瞳をした女性だった。(166) 統一はゲーテの学者さんと紹介された。ウエーバーさんは、古い手紙を統一に見せた。それはゲーテの手紙だった。それにはこう書いてあった。

「この前は花をどうもありがとう。これを友人に見せたら、こんなものでも花なのか、と驚いていましたよ。しかし、実に神の愛は1つの花からすべての花を燃え出させました。それを知れば、『我々人間もいずれは混乱せず、混合できるもの』と信じることができます。ゲーテ」

統一は、啞然とした。これをどうやってウエーバーさんは手に入れたかと尋ねた。彼女は、「私の父方のお祖父ちゃんお祖母ちゃんがゲーテの恋人だったのよ!」「うちの父が驚いて研究所に寄贈しようとしたけれど、出所がわからないので断られたらしい。それで、父は、怒って、これは絶対に守り抜けと言いつけられたのよ。」

でも、何故、あなたは、予め、義子に伝えず、わざわざ、ドイツまで呼んだんですかと聞いた。すると、ウエーバーさんは、あなたの奥さんが送ってくれたガーデニングの写真に、ゲーテの親和力をイメージした庭だと書いてあったのよ!と言った。

妻は、はるばる海外の人まで、そんな事をしていたのかと思った。



次に統一らは、統一の留学時代の友人ヨハンに会いに行った。

相変わらず、ゲーテはすべてを言ったのかどうかになった。

しかしユーモアかジョークかわからないが、またしてもヨハンは、
「ゲーテ曰く、俺がすべてを言った。」もうこれ以上、何も言ってくれるなと言った。

日本では、然の親和力盗作問題は、実は告発した維神光その人が然その人だったことが判明した。然紀典は、続いて「続神話力」を出版して、盗作疑惑は自分が仕掛けたギャグだと言った。どうしてそこまでして、自分の職を失うことまでして、学会や社会を騙したのか？

彼の主張は難解だが、本当に学問を志す人には何かぐさっとくるものがあるのではなかろうか？。

彼は以下の様に言う。

「私は学問を破壊したいのでもなければ、告発したいのでもなく、むしろ容認したいのです。私は学問と言うのは失敗と間違いの連続である、と思う。失敗と間違いこそ、多様性の根幹にあるものだと思う。神話や言語の多様性は、失敗と間違いです。しかしこの時代に間違える事は難しい。だから私が盛大に失敗してあげました。失敗してる最中は確かに仲間に対して申し訳なかった。けれど、彼らはわかってくれます。私は私が『神和力』で書いた力を実行したに過ぎません。」

統一は、呆気にとられたが、こんなことを書かれたらわかってやるしかないと思った。然は、以後は、これからの著作はすべて維神光との共著で書くと述べている。

彼は以後、大学教授の職は無くなったが、神話力のシンポジウムで、徳歌と同年ながら、パネラーの役をこなしていたKMと言う女性がそばにいた。

いよいよ、このフレーズの出典を探す旅は終わりに近づいた。

Love does not confuse everything, but mixes. の出典はまだ、本人の字によるものなのかわからないが、一人の人が所持し、確かに存在した。

これが本物かどうかかわからないが、本物でも偽物でもいいじゃないかと言っている様な気がする。これが、然紀典教授の言わんとしたことである。

また、サラダ的かジャムの的だという議論は、突き詰めて言えば、相反する価値観をどう統一すればいいかという問題意識になる。この価値観の衝突はどの分野でも起こり、それを克服することが大事だと言っている。

また、統一の様にそれにこだわる生き方がカッコいいのだと言っている。これがこの小説の真髄だ。



※数字は本のページ数。

